

絵もフラメンも楽しく遊びながら

堀越千秋は、スペインでは知られた歌手でもある。あのフラメンコの、である。ここでいうフラメンコは踊りのほうではなく、唄（カンテ）のことである。フラメンコとは、もともとカンテの一ことであり、踊りはショーとして別の発達をとげたものなのである。

そのフラメンコを、堀越は「わが愛する納豆」とよぶ。スペインに渡って十七年、堀越はついにこの境地に達した。一九七八年ごろ、アンダルシアの旧令で、歌うように勧められて以米、ついにフラメンコが体内一に入り、納豆と同じような不思議な味わいの存在となったのである。

堀越とスペインとの出会いは偶然であった。高校を出た堀越は、美術系の短大に一年だけ通った。時あたかも全国の学園闘争が最高潮に達し、入学と同時にバリケードの中へ入った。これはこれで面白かったが、なぜか「教師になりたくない」と考えて、もう一度東京芸大を受験して合格する。

芸大ではめでたく学部を卒業し、大学院に進む。卒業を目前にして、絵の勉強はパリと思いこんでフランスへ飛ぶ。しかし、肌に合わず、次はイタリアへ。イタリアは一カ月いたにもかかわらず、まだしっくりこない。そしてスペインに入った。

まさに、「スペインにはまりこんだ」としかいいようのない、はまり方だった。まだ独裁者フランコが生きていた時代だったが、「みんな親切で、貧乏人がゆったり生きていて、絵かきが絵かきであった」ことに深く感動し、スペインに住むことを決意したのであった。

それから日本に帰って大学院を卒業し、スペイン給費留学生試験の受験のためにスペイン語の勉強にとりかかった。それに合格して、スペインに渡ったのが一九七六年であった。

その後、まもなく出会ったのが、アンダルシアきってのカンタオール（フラメンコの唄い手）の名人一家アグヘター族であった。彼らはヒターノ（ジプシー）である。ふだんは鍛冶屋を稼業とし、ことあるごとにマドリードなどに呼ばれては、その一自慢のノドを披露する、知る人ぞ知るカンタオール族だった。

堀越とアグヘター族は、たちまちにして肝胆相照らす仲となってしまった。東洋のはしっこから来た絵かきと、定住を強いられ、今なお差別を受け続けるヒターノたちとの、それは奇妙な取り合わせかもしれなかった。しかし、堀越はいささかも気にすることなく彼らとつきあい、義兄弟となった。堀越は、天性のヴァガボンドなのである。

その隔越がマドリードにいるのは一わけがある。アグヘター族の住むアンダルシアに行ったら、毎日彼らと遊んでばかりいて絵がかけなくなるからだ。それほど彼らとの生活は魅力的で「その中に溶けていきそうになる」くらいだからだ。

その誘惑に抗して制作される堀越の作品は、明るく、楽しいものである。「スペインにいるからかける」けれども、時々日本に来て経験する、日本の緑、蝉の声は「それはそれで懐かしくていい」。しかし、やはり本拠地はスペインなのである。

とはいえ、堀越の根っこにあるのは、今もわずかに日本に残る欧米信仰なんてものとは、まったく無縁である。そもそも、そんなケチくさいことを堀越は考えもしない。

だから、フラメンコについても、「こうでなくては」というご託官はまったくくない。ついでに、「これが自分だと思えるものは、ドンドン変える」という制作態度でもある。堀越は絵かきの自分についても、「これでなくては」とは少しも考えないのである。楽しく、遊びながらかければそれでいいのである。

マドリードの堀越のアパートの裏からは、地平線が見える。この夕陽を見ながら、友人たちと美酒をくみかわし、興じればフラメンコを歌う、これぞ最高の贅沢と見えた。

寺田侑